

(4) 分析的・診断的評価

分析的・診断的評価として、体育における器械運動領域について考えてみることにする。そのねらいは、運動そのものを楽しみ、技能を競う運動になるので、観点としては、内容を技能・態度の面から分析した項目があげられるだろう。評価基準は、「よりじょうずにできる」、「できる」、「できない」といった尺度でつくることができる。

この種の評価は、行動・観察のチェックリストによることが多いようである。その中心を「できる」段階とし、できるようになった時限でチェックし、「できない」段階のものについて、分析的・あるいは診断的に検討し、努力させる。「できる」ものについては、「よりじょうずにできる」よう助言するのは当然である。

次にその一例をあげることにする。

第 16 表 分析的・診断的評価 6 年体育 腕立て閉脚とび (3 時限取り扱い)

氏名	技 能				態 度				総 合 評 価	
	個 人 的		集 団 的		④ 用具使用のきま	⑤ 準備を分担し、 協力を提供する	⑥ 体調を整え練習 しようとする	⑦ 安全を確保し、 場所を整備し、	所 見	段 階
	① 両足での踏み切方	② 両手のつきはな方	③ ひざの曲げ方							
A	✓	✓			✓			✓	とび方をリズム ムにする	○
	○	○	✓		○		✓			
B	✓					✓		✓	活動力をつけ タイミングを あわせる	×
		×	×		×		✓			
C	✓	✓				✓		✓	ひざを早く胸 につける	✓
			✓		✓		✓			

よりじょうずにできる — ○ できる — ✓ できない — ×

(5) 継続的・包括的評価

継続的・包括的な評価として、到達度曲線による評価法を考えてみることにする。到達度曲線のつくり方としては、

① 授業過程で、技能を段階的にとらえる場面を

いくつかに分ける。

② 段階項目を3～5段階とする。

③ 授業後の段階を線で結び、教師の期待線と比較して評価する。

次にその一例をあげることにする。